

## 靱街道

### 昔は靱への難所・三分坂

福山から靱への陸の道は、「靱街道（往還）」と呼ばれます。

中央公園に移されている道しるべには、「右 ヲノミチ道」「左 トモツ道」と刻まれています。もとは、霞町通りの西端（霞町四丁目信号）にあり、ここが靱へ向かう靱街道の起点でした。道しるべから芦田川に向かって西南に真っすぐ進み、鷹取橋、銭取橋を渡ると、半坂道と靱津道の分かれ道にたどり着きます。

ここから山すそに沿って南へ進むと、清水池脇に延宝2年（1674年）と刻まれた水呑町最古の法界塔があります。この辺りからは、福山城下を望む



三分坂

ことができます。

法界塔を後に南に進むと、高木川という井戸があり、旅人の水呑み場であったと伝えていきます。さらに水呑小学校沿いに200mほど進むと、今では道路拡張のためなくなりましたが、観音堂（辻堂）がありました。

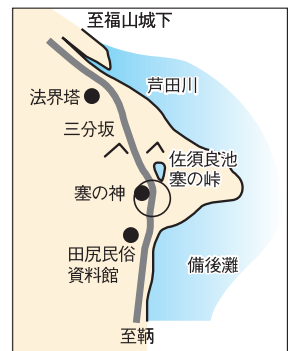
この辺りは鍛冶屋（鍛冶谷）という地名で、『福山志料』によると、ここには「一乗」「助國」など多くの刀匠がいたといわれます。この辺りを通るときは靱の音と刀を打つ音が聞こえたことでしょう。

向丘中学校正門前の道は三分坂（西の八王子山・東の向山を分ける山分坂などの説）と呼ばれ、坂の手前には麦茶屋があったといわれています。

三分坂を越え佐須良池を過ぎると、海が見える田尻境の峠「塞の峠」に着きます。城下へ向かう人を見送る予ら



塞の神



当時の地形

は、ここにある塞の神に、「三分坂を上る時は足が疲うありませんように」と祈っていたそうです。

田尻では3月下旬ごろ、通る人たちの目を楽しませる杏の花が咲き始めます。天和元年（1681年）阿闍梨尊意が豊後国（大分県）から持ち帰った種を植えたことが始まりと、伝えられています。

田尻民俗資料館の先を右手に上った道を、しばらく歩くと左手に備後灘が見えます。下方の海岸沿いに見える県道は埋め立てられたもので、当時は山沿いに歩き、靱に向かっていたと思われます。

この靱街道も、交通機関の発達に伴い新道ができたため、当時の街道の跡をたどることが難しくなっています。

（1999年10月号に掲載）

# 俄来越への道

## 駅家・府中からの近道

書物によれば、山手町と津之郷町との境を北に延び、駅家町今岡に至る道の峠を「俄来越」「俄峠」「俄山峠」などと書かれています。現在は通る人もなく、ほとんど通行不能なこの道も、かつてはかなり重要な道だったと思われます。

山手町の柵原地区にある「中池」畔の辻堂に、明治時代の寄付者名簿が掲げられています。約600人の内、50人余りが「今岡村」（駅家町）、「福田村」（芦田町）の人々です。この人たちは、福山への近道としてこの峠を利用し、行き帰りにこのお堂でしばしの休息を



「俄来越」遠望。中央の低い部分が峠

とっていたのでしよう。ここから山陽自動車道の下を通り、8分ほど歩くと「俄池」の西側に着きます。ここには、拓本で示している「道しるべ」が建てられています。途中には「府中道」と刻まれたものも見られます。土地の話では、子どもたちには「俄来」を越えて新市町の一宮さん（吉備津神社）に参っていたそうです。

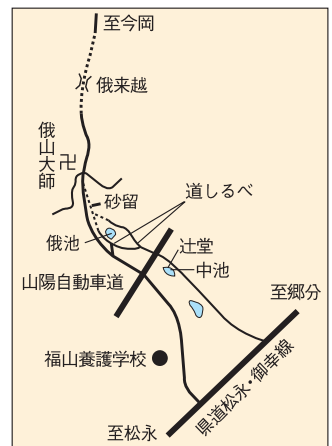
この池の上流300mほどの場所には、江戸時代に大きな「砂留」が造られています。現在は、草や低木が生い茂り、近づくことはできませんが、同じような「砂留」は、本谷川（津之郷町）、大谷川（本郷町）、堂々川（神辺町）などに見ることができます。



▲中池畔の辻堂



▶「俄池」西の道しるべ拓本  
「右、今岡」通す



（ここを過ぎると、まもなく『弘法さん』と親しまれている「俄山大師」に着きます。このお大師さんには、名水として名高い「弘法の水」と呼ばれているわき水があり、水をくむ人が今も絶えません。それを利用した入浴施設なども設けられています。「沼隈郡誌」によれば、大正時代の中ごろにラジウム含有水であることが判明したと書かれています。駅家方面の人々は農繁期が終わると、峠を徒歩で越え、ここへ骨休めに来ているそうです。今の温泉ブームの先駆けといえるでしょう。ここ数十年の間に、私たちの生活も大きく変わり、俄来越えをする人は絶え、山道には雑草やクスが茂り、忘れ去られようとしています。

（1999年11月号に掲載）

## 藁江峠と岡本池

### 茶の接待と島の浮かぶ池

赤坂町早戸から金江町藁江わがえに抜ける藁江峠（早戸峠）を越える道は、福山城下から沼隈半島西部へ通じる最短距離の道です。

現在では農免道路が通じ、車では瞬く間に通過しますが、この峠は標高100mの位置にあるため、徒歩に頼っていたころは、どちらから登っても長い坂が続く難所でした。

峠に登ると、西側に「永代茶接待」と刻まれた二つの石碑と、長石を使った休み石が一つあります。碑の文面や



永代茶接待碑

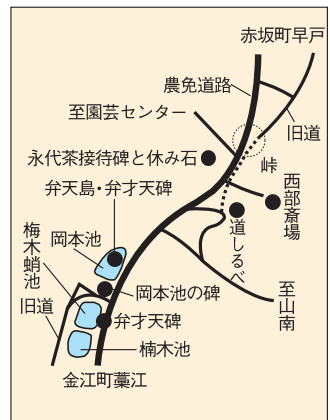
言い伝えによると、暑い夏の日に汗をかきながら峠を越えて行く旅人のために、藤江村の岡本（屋号）山路が1817年から旧暦の6月と7月に限って茶の接待を始め、休み石を設けたとされています。

茶の接待は、明治時代にいったん途絶えましたが、大正時代になって金江村の有志によって復活されました。その後、戦争で中断した時期もありましたが、1955年ごろまで地元青年団の奉仕活動によって続けられたといわれており、旅人を思いやる温かい心が伝わってきます。

峠から南に200mほど下ると、旧道沿いに「右ふじ江」「左さんな道」と刻まれた石の道しるべがあり、街道



岡本池と碑。  
池の中に弁天島が見える



の名残がうかがえます。さらに、80m先には岡本池・梅木蛸池うめのみさざわ（中池）・楠木池（下池）が続いています。

岡本池は、前述の山路が1818年に造った池で、土手に記念碑が建っています。池の中央には、琵琶湖に浮かぶ竹生島に習って弁天島（中島）が造られ、そこには水が枯れないことを祈って弁才天が祭られています。なお、同じ意味を持つ弁才天の碑は、梅木蛸池の東側にもあります。

岡本池の東側を通っていた旧道は、湖面に浮かぶ美しい弁天島を右手に見ながら、この池の土手を通って山裾から南に下っていました。そして、楠木池あたりまでくると、田園地帯の広がった藁江の集落が見えてきます。

（1999年12月号に掲載）



## 熊野水源池①

### 近代的な水道の敷設

1916年（大正5年）、福山町が福山市となり、まず取り組んだ事業が、市内への近代的な水道の敷設でした。それまでは、水野勝成が建設した旧水道をそのまま使用していました。

水道の水源をどこに求めるか、種々の調査・研究の末、熊野村（現熊野町）



熊野水源池

最大の灌漑池であり、水量の豊富な論田池に決定しました。

まず、論田池の下手に大堰堤を築いて、より大きな水源池とし、佐波村城山（現佐波町）には浄水場を建設しました。そして水源池から浄水場までの経路を送水管で導き、浄水場からは配水管で瀬戸川、芦田川の川底を横断させ市内に巡らせたのです。これら一連の大事業は、1922年（大正11年）から1925年（大正14年）まで、3年5か月もの長い年月と、169万6,



水源池土堰堤暗渠

318円の巨費を要しました。

水源池の堰堤は、長さ190m、高さ28m、上部幅4.5m、基礎面最大幅120mで、堤の中心には粘土を入れ漏水を防ぎ、内面には石を張り風波の浸食に備えるという、大規模で堅固な構造となっています。

堰堤内側には、高さ29mの円筒型取水塔が設けられ、4か所の水道用取水口と、1か所の灌漑用排水口があり、取り入れられた水は、堰堤底を横断する暗渠を通り、外に送られる仕組みとなっています。

築堤、取水塔建設の作業はすべて人手によるもので、延べ28万人の人がこれらの建設に携わりました。こうして、論田池は満水面積94,215㎡の大貯水池に生まれ変わったのです。

（2000年9月号に掲載）



## 熊野水源池②

### 近代都市への第一歩

前号で紹介したように、熊野水源池から取水した水は、送水管で熊野、瀬戸を経て佐波浄水場まで送られます。送水管は径30cmの鉄管で道路下を中心に地下に埋設され、総延長は8.5kmに及びました。

浄水場は城山の山林を切り開いて、ろ過池4池と配水池2池が建設されました。ろ過池は、長さ30m、幅24m、



佐波浄水場配水池(正面)

深さ2.5mで、底にはレンガを2段積みし、その上に砂利と砂を敷き、水をろ過しました。人口5万人に対し、一日一人最大給水量125リットルの水をろ過することができたといえます。

配水池は、長さ27m、幅15m、深さ3.8mで、ろ過された浄水をいったん貯水し、配水します。水を還流させて停滞させない構造とし、また、レンガでふたをし、これを土で覆い、外気による浄水の汚染を防ぐ工夫がなされています。

配水管は径40cmの鉄管で城山を下り、芦田川の川底を横断し、分岐しながら



佐波浄水場配水池(側面)



市内の給水区域に敷設されました。その総延長は約41kmに達したといわれています。

1925年(大正14年)、さまざまな苦難を乗り越え水道施設が完成し、福山市は近代都市としての第一歩を踏み出したのです。

福山市発展の礎となり、市民に潤いを送り続けた熊野水源池は、佐波浄水場の休止(1977年)などにより、役割が縮小されましたが、熊野町内では今でも水道水およびかんがい用水として利用されています。

(2000年10月号に掲載)

## 鞆町の井戸① 港町の貴重な水

鞆は古くから栄えた港町で多くの史跡を残しています。その中で、人々の生活と深くかかわってきたものに、井戸があります。

海に面した鞆では、飲料水など生活用水の確保が重要な課題で、井戸は山の谷あいからの水筋に掘られました。

『備陽六郡志』には、「今川 祇園の前に有。所の詞にて井を川と云。寛



柳川

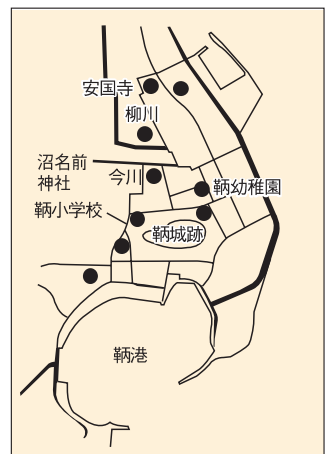
文の初(1661年)、中村市右衛門(鞆奉行)、秋八月、此井掘せける。…」、「柳川 善行寺の前に有。天和の末(1684年)、尾関左次右衛門(鞆奉行)掘せけるか、此浦には水不自由成所なれとも…」の2つの井戸の記載があり、これによって鞆では古くから井戸のことを川と呼んでいたことが分かります。

これらの井戸は浅之谷からの水筋を選んで、鞆奉行と町衆が力を合わせて造ったものです。「今川」は現在コンクリートで覆われていますが、「柳川」



井戸の内部

井戸の分布図



は今も見ることができ、四角形の井戸枠は一边が94cm・縁の高さは45cmの大きさです。

浅之谷の南側、草谷の水筋にも点々と井戸が残っています。幼稚園前にある井戸は、一边が1m67cm・縁の高さは67cmの大きな四角形の井戸枠をもっています。

この井戸は、古絵図を見ると鞆奉行所内に位置しています。奉行所内にはそのほかにもいくつかの井戸があり、明治以降はいずれも共同井戸として使用されました。

(2000年11月号に掲載)

## 鞆町の井戸② 往時をしのぶ共同井戸

前号で紹介したほかにも、鞆には共同井戸など多くの井戸が残っています。浅之谷の水筋にあたる原町には、商人が造った共同井戸があります。この井戸は、六角形で一边が71cm・縁の高さ42cm、「安政三年辰八月吉日」（1856年）と刻まれています。同じ水筋の、安国寺釈迦堂前にある井戸も石づくりの井桁で、一边が1m6cm・縁の



大井戸

高さは58cm。室町時代に造られたものと考えられます。

草谷からの水筋にあたる鞆小学校下には、『大井戸』と呼ばれている井戸があります。今では建物の陰になり、その縁しか見ることができませんが、ポンプが付設されて取水することができます。

江之浦元町の道沿いにも、商人が造った見事な花崗岩の井桁をもつ共同井戸が残っています。この井戸は2段積みみの六角形で、一边が1m17cm・縁の高さは68cm、「文化十年酉」（1813年）と刻まれています。



江之浦元町の井戸

井戸の分布図



井戸水は、飲み水だけでなく酒や酔づくりにも利用され、海岸近くのもものは、商船や参勤交代の船に売られていました。

井戸替えは旧暦の七夕に行われ、中の水をすべて出し、井戸底に敷かれた玉砂利を取り上げきれいに洗った後、再び底に敷く作業を行っていました。今では、この作業を見ることもなくなりました。

（2000年12月号に掲載）



## 本谷川の「砂留」 川を守る砂防ダム

「近年は草木之根迄掘取候故、風雨之時分、川筋え土砂流出…」。これは、江戸時代前期に出された「諸国山川掟」という法令の書き出し部分です。

全体の内容は、近年山地の開発が進み、雨が降ると土砂が川に流出するので、今後開発を禁止して山には植林することなどが書かれています。むやみな開発を戒めたものでしょう。



大きな石で築かれた砂留

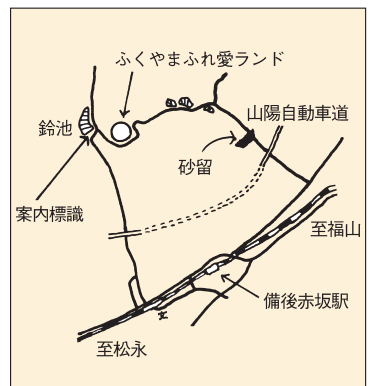
この法令と直接的な関係はわかりませんが、備後の南部には「砂留」がいくつかの小河川に造られています。花こう岩の風化した真砂土でできている山からは、雨が降るたびに多量の土砂が川に流出して川底を高くし、洪水を起こしていたものと思われます。

そのような「砂留」の一つが津之郷町を流れる本谷川の上流にあります。

長さ約45m、高さ約10mと、まるで石で造られたダム、あるいは城の石垣のようです。造られた時期は、江戸時代後期と考えられています。付近は砂防学習ゾーンとして整備されているので、



本谷川の砂留公園



一度訪ねて昔の人の知恵や技術をのんびりみてはいかがでしょうか。

このように大きな砂留（砂止め）は、市内では本郷町や山手町、神辺町の谷川に見られます。

近年は、生活様式の変化により世界的規模で森林伐採と開発が進められ、地球温暖化などが心配されています。21世紀は、自然を守り、美しい地球を後世に残したいものです。

（2001年1月号に掲載）

## 瀬戸池

### 福山藩の三大池の一つ

瀬戸池は、福山駅から南西方向に直線で約5kmの場所にあるため池です。

福山藩がかんがい用として築造した三大池の中では最初のもので、1635年ごろ着工し、1637年ごろ完成しました。志田原川と論田川(筒井川)が流入する当時沼隈郡第一の大池で、地頭分村と長和村の間にあり、長和の大池とも呼ばれているようです。『沼隈郡誌』によると、池の大きさは「面積14町6反7畝26歩(約15ha)」と記



瀬戸池改築記念碑

されています。

この池の特徴は、底樋※そこひ(約130m)にあります。岩盤をくりぬいて造られ人が通れる洞門となっていて、三百年前のため池としては、類例のないものです。当時の土木技術を考えると大変な難工事で、暗やみの中の作業は、明かりと換気に並々ならぬ気がつかいがあったものと推測されます。

その苦難を示す一つの伝説として、一組の若い石工夫婦が東西に分かれて掘り進めていき、中央部で少しの食い違いがあったものの、みごとに底樋を完成させたという話が残っています。完成したとき、二人の頭髪は真っ白で



堤付近

あったそうです。

現在は、上流から土砂が流入し、池の面積が狭くなっていますが、1967年の「瀬戸池改築記念碑」によると、満水面積10ha、貯水量41万m<sup>3</sup>、受益面積138haで、現在も貴重な農業用ため池として利用されています。

また、池の堤周辺には桜が植えられ、春には美しい花を咲かせます。

※底樋：土手の下をくぐり、池の水を池の外へ導き送るトンネル状の水路

(2001年6月号に掲載)



# 銀山城跡

## 福山湾を望む堅固な城跡



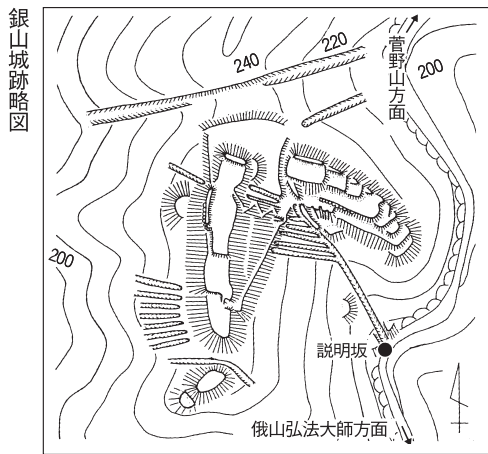
弘法大橋付近から見た城跡(手前は山陽自動車道)

市内山手町の北側にある銀山城は、高増山から南に延びる尾根を堀切によつて切り離し、東西約150m、南北200mにわたつて郭・堀切・堅堀・石垣などを多数配置した市内でも有数の規模を持つ堅固な山城です。この城には、戦国時代に備後南部で大きな勢力を持っていた杉原氏の一族

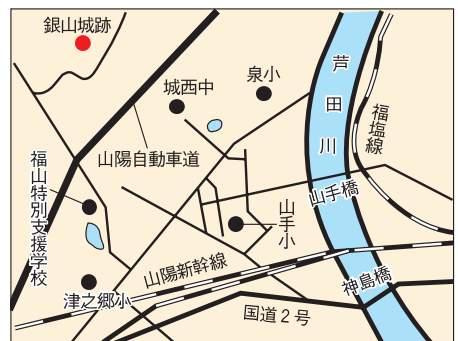
が居城し、山手杉原氏を名乗っていましたが、一族間の相続争いに巻き込まれた結果衰退し、後に廃城に追い込まれたと伝えられています。

この城跡へは、霊水で知られる俄山弘法大師への車道を登るのが便利です。弘法前の四辻を東に約1.3kmほど進めば、山際の谷筋に城跡の説明板が見えてきます。

この谷筋は、かなり険しい登りですが、城主の菩提寺であつた三宝寺からの登城路となつており、登りつめると山頂部には三段からなる主郭群が南北に長く連なつているのが分かります。主郭群の西南と東側には多数の堅堀



銀山城跡略図



があり、南側の尾根先端にも堀切をはさんで二段の小郭が築かれています。また、東側の尾根筋にも堀切をはさんで階段状に8段の郭群が広がっており、石垣が残っている部分もあります。城跡からの眺望はすばらしく、西は松永方面、東は福山湾一帯にかけての広い範囲を見渡すことができます。

(2001年9月号に掲載)





## 神島城跡

### 足利将軍側近の居城

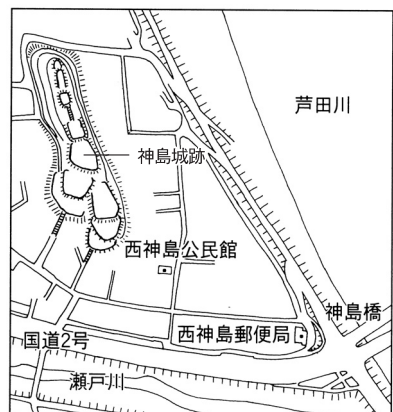
神島城跡は、国道2号神島橋の西詰めに位置する小高い丘の上にあります。芦田川河口に近いこの周辺は、古代から陸海の交通の要衝として、多くの人々や物が往来していました。『万葉集』巻13と巻15にもこのあたりの情景

が詠まれており、現在神社の鳥居側には、万葉歌碑が建てられています。

城跡は、林に包まれた南北約200m、東西100m、標高10〜28mの丘一帯に広がっています。現在、寺や神社の敷地になっていますが、城郭の一部とみられる10か所ほどの平坦面が確認できます。最も高い場所には物見台の郭があり、この南側が主郭とされます。山城としては低い場所にあり、居館的機能を持った城です。『福山志料』によるとこの城は、室町幕府最後の将軍足利義昭に側近として従った、真木嶋（禎嶋）昭光が居城していたと記されています。

この付近は、中世には神辺平野から瀬戸内海の重要港湾であった鞆への中継地となっていました。西側一帯には長和荘と呼ばれた荘園があり、南には大規模な市場町として発達した草戸千軒町がありました。

城のふもとにも、船着場を伴った神島上市・中市・下市と呼ばれた市場町があり、東小屋・西小屋・総門などの地名があったといわれています。これらの市場町は、江戸時代になって福山城が築かれると城下に移され、城下町



の中心として現在の市街地の基礎を造りました。

(2002年2月号に掲載)

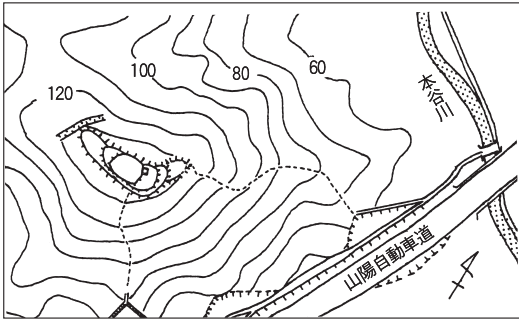
## 串山城跡 多くの岩が残る山城



串山城跡(中央の山)とサービスエリア

津之郷町の山陽自動車道福山サービスエリア南西約500mに、標高140mの小山があります。この山頂付近に串山という地名があり、そこに戦国時代の山城跡があります。江戸時代の書物に「串山城は田辺寺てんべいじの後の山に在り」と記されています。田辺寺は、串山城主として備中から移ってきた田辺光吉が建立したと伝えられています。

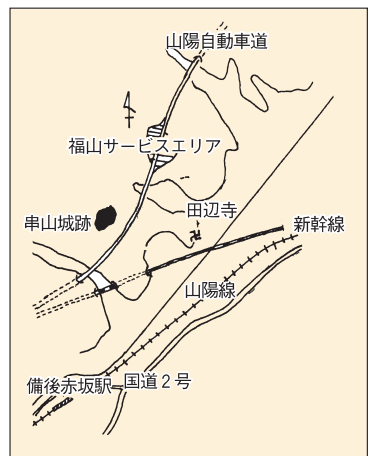
山城の南東側、高速道路側道から急



串山城跡略図

な山道を登りますが、その途中には石段状の石や門柱のような岩があり、休まずに登れば15分ほどで頂上に着きます。そこからは、東に福山の市街地や笠岡諸島を望むことができます。

最も高い場所に石鎚神社いづまじんじゃが祀られており、ここが山城の主郭です。平坦面の広さは約20m×約15mです。大きな岩がたくさんあり、建物はそれらを避けて建てられていたと考えられます。拝殿のある場所は、一段低く第2郭と考えられます。その南東下にも郭状の場所があります。しかし、この山には、いたるところに岩が露出しており、郭



などの認定が困難ですが、主郭から北西の尾根筋にも2段の郭が認められ、その先には幅3mほどの堀切状の痕跡もあり、北西からの攻撃に備えていたものと思われます。主郭の南下には、北西と南東の郭を結ぶ帯郭おびのぐらもあります。

南側にも山道がありますが、非常に急なため、足元には注意が必要です。

(2002年6月号に掲載)

## 常楽院と村上水軍 内海で最も古い寺

内海大橋を渡って海岸道路を西に向かうと、内海ふれあいホールに着きます。その駐車場から、細い路地を南に歩くと、左手角地に「于時文政元年戌寅七月吉日」と1818年の年号の入った『日本回国供養塔』が建っています。その先すぐ右手には、井桁に「明治二十六年」と刻まれた村井戸があり、町の古い歴史を感じさせます。ここから



常楽院

ら左手山腹に向けて坂道を登ると、仏徳山常楽院の建物が見えてきます。

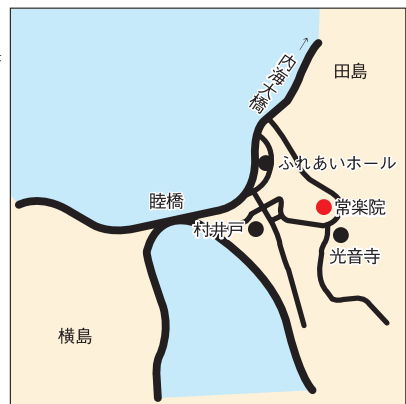
この寺は、天平9(737)年、奈良時代の高僧行基によって、大浦地区に創建されたと伝え、その後、延喜18(918)年の豪雨で崩壊したため、翌年、現在地に移転したという、内海では最も古い寺伝を残しています。

山門の前には、江戸後期の文化文政時代(1800年代前半)から明治・大正にかけて、西国との交易によって財を成した商家の屋号を刻んだ墓石群が、並んでいます。

寺の北西の墓地には、古い五輪塔や



村上水軍墓地五輪塔群



宝篋印塔きょうが並び、田島村上水軍の墓塔と伝えていきます。内海町が村上水軍とかかわりをもつのは、正長元(1428)年、因島村上氏初代・備中入道吉豊が、播州赤松満祐討伐出陣の功によって、備後田島の地頭職をあてがわれてからのことです。常楽院の裏手に突出している天神山城跡は、吉豊の子吉則が築いた水軍城跡と伝えられています。常楽院のすぐ上手に、光音寺があり、入船の目印となったギンモクセイの大木が目に入ります。このあたりからは、西に向島や因島大橋など、美しい瀬戸の島々を望むことができます。

(2003年6月号に掲載)



# 横島家廻地区の胴八幡

## 石造物の宝庫

田島と横島を結ぶ陸橋から、海岸通を南へ300mほど行くと、やまわり会館が右手に見え、その前の小路を西に進むと、四つ角に旧横島のシンボル・平和塔の時計台があります。その正面高台が、横島八幡神社の境内です。さらに四つ角を左手にとり、迂回しながら西に進むと、一の鳥居に出ます。この鳥居から二の鳥居、そして石段を上った境内一帯は、内海町内一の石造物の宝庫です。石段中ほどに建つ石灯笼の竿石には、「延享元年」(1744



「胴八幡御霊代安置の跡」碑

年)という町内最古の年号を刻んでいます。

三間社入母屋造りの本殿は、向拝、千鳥破風、唐破風付きの建物で、いかにも重厚なたたずまいを見せています。1580(天正8)年の創祀、1764(明和元)年の再建と伝え、豊前宇佐八幡神宮の分霊を祭神としています。現在の社は、1913(大正2)年の火災の後1915(大正4)年に再建、1991(平成3)年に全面改修されたものです。



二の鳥居と参道石段

この神社を地元では胴八幡と呼んでいます。古文書によると、往古、藁江・



常石・横島3村の鎮守であった常石の藁江八幡神社例祭の日、船で対岸の常石村へ向かっていた横島の氏子たちは、折からの暴風にあおられて宮座に遅刻してしまいました。ところが、神社では既に祭礼が進行しており、怒った氏子たちは、ご神体の奪い合いの末、胴体部分を持ち帰り、現八幡神社に祀ったというのです。本殿正面右手に「胴八幡御霊代安置の跡」碑が建っていて、裏面に神社の縁起を記しています。神社の東丘陵上は家廻運動公園で、ここからは横田漁港や口無の瀬戸一帯の美しい風景が展望できます。

(2003年9月号に掲載)

## 天満のみずのうさん 福山藩主ゆかりの神社

内海大橋を渡って坂道を下り、三差路を西に100mほど行くと、天満のバス停が見えてきます。隣接して地区の集会所があり、そこから南正面を見上げると、樹齢300年と伝えられる大ムクの木が200mほど先にあります。それをめざして坂道を登ると、水野神社に出ます。

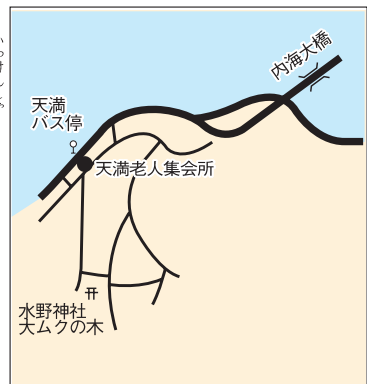


水野神社

地元の人は、この社を「みずのうさん」と呼んで親しんでいます。口伝によると、寛永年間（1624～1644年）、天満村は、家屋や畑地の大部分を流されるといふ大洪水に見舞われ、村人が明日を生きるすべもなく困り果てていたとき、藩主水野勝成はこの惨状を憂い、しばらくの間年貢を免除し、村人の暮らしを助けたといえます。村人たちはその温情に感謝し、1698年の水野家断絶を機に、大西頭荒神社の境内に社を建て、水野勝成を五穀豊穡の守り神として祭るようになったそうです。



飛龍の透かし彫りと墓股の水野家紋



一間社流れ造り、本瓦葺のこぢんまりした社ですが、正面奥の墓股には、水野家ゆかりの立沢瀉の紋様が分厚く刻まれており、正面前の墓股には、翼を広げた豪快な飛竜と鬼面が表裏の透かし彫りで刻み込まれています。内浦の宮大工、藤原氏の建立と伝えられ、虹梁や木鼻、手挟、懸魚などにもそれぞれ巧みな彫刻が見られます。

また、この社の鬼瓦には、阿部氏の鷹の羽の紋様が浮き彫りにされています。水野治世の温情が、後の阿部氏の藩政にも継承されたということに対する、村人たちの謝意が象徴されているのだと伝えられています。

（2003年12月号に掲載）

## 西音寺の仏像

### 横島を代表する古刹こさつ

陸橋を渡って横田漁港沿いに県道を300mほど南下すると、やまわり会館が右手に見え、その先を右折して、集落の中道を100mほど上ると広場に出ます。

この広場北側の路地の入り口に、切妻造り平入りの地藏堂があり、堂内には6体の舟形浮彫りの別石地藏が安置されています。いずれも、半円形の石柱の上部に仏像が、下部に地藏名や



西音寺

願主・施主名などが刻まれています。敬白年月が寛永20(1643)年8月となっており、室町時代創立とされる西音寺の昔の参道は、この辺りから続いていたと考えられています。

地藏堂からさらに200mほど上ると、御堂山西音寺があります。石畳を敷いた現在の参道の入り口には、丸彫り別石の6地藏が祀られており、山門をくぐると右手に大きな鐘楼が見えます。この中四国随一といわれる450貫(約1.7トン)の梵鐘には圧倒されます。境内では、等身大の石造修行大師や、

鑄造の金剛華菩薩像が拝観できます。



金剛華菩薩



この金剛華菩薩は、心を育て徳を授ける仏として信仰を集めています。その大きさや美しさは、全国でも有数の仏像といわれています。

西音寺の本尊、十一面観世音菩薩は秘仏ですが、本堂には、県重文の木造阿弥陀如来立像や、智拳印を結ぶ手が左右反対になっている金剛界の大日如来像2体など、室町から江戸中期にかけての仏像が祀られています。

(2004年3月号に掲載)